菟玖波集　天

911.3
ツ

序

余乃酒人也尤持蟹螯右搴酒盃無暇學也之所謂詼諧之詞雖然紙上有墨者不得不瀏覽焉頃者觀鈴道彥所撰

蔦本集言々句々皆有
風致足以悦人之耳目
於是酒間或摘其句以
供於文字飲之具毎添
豪興不覺醉倒甕頭矣

同書此言于其端尓道
彦僊臺之産舎号金令
僑居于江戸以其技鳴
于世云

鵬斎老人識

題辭

一種神しの風徳は川の流れあふれて久し只今
の金令之舎これを花七ツ子の口きくより出る句
句を拾ひくさむら今に年々是かの集ニ此集
にのせくりへてもとて春さるしらぬあしともい
ちんめいなくしとやいさん且甚多かる中にハ
みなのもとあやまりも不抄業をと云ふ稀人の句
を我よしる名のまるしあのよしる作を人の名
ふれしとしたる類若干もありけるいとや
あしては右きさる節人のことをあつ凡
も字法を以て俳諧流行せし折の強ちに

ところ面かしれとへとも及ふ執するの
ゆゑとりて是祖口をしれうとましきる
いあるゆゑへし未山のあめのうきを初東ニ起和
其林ちち楢柿えへてさゆへし あるの介
若みの葛の一作か白とかくへし昔川ちりさる
きりひくきりそれとも本ともつちかさく深
あらしてあわしり作とも一旋りその根ふよりて
一茄と川よのせこ作ハ氣の葛とも楽の枝と
もあきらけくつ化待らんらとそしこの集の標
題して時そむる若みのをとの漸文あるの
こと

一俳諧は句集あり家ゝの集者と
同し其家の風吹独人を悲しむとり法
此きらる家の子備るる門人等るの作を
いさをしわきも有名化又別り一家有名利
之卯の田地持廣あり此も若子も化とりある句
移者の家をとえし迷て悦てらんハ芽出度候
をとしそ云へ少化化して出ふるるるも集あん
卑り何ゝすをとの字何ゝすをとの無ふ属きとそ
身之川かし操を定めて何事の句集あと
いう言しま此めくそ人の目の翫ちう此する
業あり又やや採の世にを恥し化と之一類

の詠とも横すへたる人の心浅くならすすゝむるに
ふるき金令社裏に筆まめの輩と云此序に
おのての志れ者有名なりしの正徹法師となから
へ詞の草の根集をやなりひめくりん右に左に
ありて海の子稲とて晩稲に稲ひあり川の書あ
川の浅く年々詞ふくよらなる粉こそして
拾ひるを浅くくしとこの芸道の世の評に斗
すせらる吾との是非なれば半途に
してかゝる目に逢ふ布とくされなくや晴きその
卯月の書きし刈られし心地をえし浅
ふやきくめ旅

前に云文字手本を写鄭もすなはち違し
て詩集に生されたるの多きを盗めやん
の思ひを企随ふものありたるの芸の世あり作は
四韓旅感偶に生れし初の書の鉄流とま
きる海しれの微をと微さんかためにもしも浅く
りと載てあるたれをと厭されよ目出席の
説中らてく自他の作ら明なりんかためと
人の名をも記を殺されたる人他の家の集
にくるつて類らもしくと云事なれ

暮のれと春之部

路山

すらくと明る名なや玉の春

さ日暁や去柄のもしふ離されく

元日句し二日飲す

驚覧ん りしゆふ翁のむものちる

前の柄も柄ん うちすす門暦

舗そしやし都も徒ゐて此暮ゐろふ

梅をすま来の神情戒ふふ詩筆玉人

智るの一字をとふて飲干操り侍る

大和ふりし玉のちるとも中ゝり

うきをあれ鶴手あくるによ　やよ　硯
も川まつハ葉うりもまぬやかもしろし
こまちに来てもせきるや　四十雀
すしこ川の此寺に年籠の通夜や
る旅の冥加ある家々あつかる哉や
暁念日参るとて　此あたりへそひ
らちするみ化三年のたくいまあり
初としの遊も瓢禄　同の沛座
正月八日あかり足袋もくし　月夜かな
梅翁の塚にまゐるさへ　まち　こて　詠
松るや　小比くめ合ものを作て来る

西宗やもことあくみ　新もせす
若きハや松ともさせし来ある気拳　嶺
医細のあとを名の子の月あ

七種

けう葉の三夜　頌忘しくもこ又のみかり
檐をくし　松角も多つハ茶葉にかな
宗川も凍るとやまにて名の前

讃壽星寄白鹿之圖

埤雅曰鹿乃仙獸性能自樂
角下少懐瑠盖有蒼者有白
有玄皆千歳之後而所變
之文色也壽星豈不愛乎

あの程ふる路ひしきり　夜月　唐

春風

春風や日陰の花も折らぬ春
きる風や家名入れや　京大二郎
よき人のよ組申や似し　春の風
春の日や松葉に捨てもあそぶらし

ちゝ母と松もわ行や春の始末
山の尾ものとゝまつり禅ありく

夏眠

月雲のありかさゝの露月しけ
小池ありも汀ととあしも夏眠山月斗
かたき日の風さゝく立霧かな
秋讃てし見ちしがひとつ月霧哉

螢　雲の膳うそなんと

露多寝の螢ゆやも夜しゝめ
螢の雲る止れる紫ちし免ん
うゝひまの渕平まゝ花しゝ小蔵るる

うそ啼やなかく神る　梅は宿
めで梅の咲出日永し　栄るのまく
山路も見えぬ　あるかなく　霞の庭
能くそり実りぬひそりも見ぬやまの
まつの人　賤の業　くれをとゞめり

猫恋

とめ尾根の高みにおそはれて福この鳴
この頃は傍らも流れ尻　男ねこ
山ひと月　あまたの　猫のまゐるよ
火傷ねこ　かくても　まだつれぬ哉

白兎

千代寿も算へてみれば　にみ名の
にみすの水すてゝかに　汝れとえ
ありいをとの　為を見ぬとく　手ぬかり
榛の木は　あるへ　来ます世　あてと汁

梅

山家の梅　さかりして　立ありぬ
ことせ見ぬ　こちらもまありし　梅の色
宵の梅　堺の座の　床も白き匂し
隠士の梅も　咲けり　千代のある
せり川きかる　此日のくもしくてゝ
ちりとは　おそひ　榛かきやありし

子とも見えしハそれもしらめかしかし
はめくしと諺く笑顔や言の梅
鴬かさりや梅にもひと月はつかける
梅の香も蕾（ツボミ）にあることよせのあり
育ちハまさる仙やしうゑんのまふ

梅や也

さす傘も江戸ハ梅見も麹なり
涼笠ハかるの薹もしめしもむ
久しぶりなりて茄ぬ花　梅はちき

棲

一まちの春を梅なる　棲の印

庭の棲呆顔やけしてはるまふ
信長ふりたるなかれやちるはちき
となくしてく月を見れ　棲の印

柳

とり分て花ちる宿の中なきの印
背弟びとの子嫁ぎはくれの所縁こち
のくれ文の名雁の茶人までに遂に居
いつれもまさくりてたのきしのよれもよ
よもみれふしひて湖かたき浪小ふまでしの
子ふ出て来まり光に訪かはきたるとひ
しめく漫興なり

あさかへし雨の晴くる柳かな
田舎しる紙なき限ハ茶ハのこし
亀川茶のやつされし史と見るこゝち
極めて茶の指南する茶わまつ
かゝる茶ハえん茶をあり春の茶さ
夕けけやまさる日とりある茶の芽
住くらしつむや橋の行ゑかも
名月
きくの都や田菱の苗色の小酒とて
名月や裏かしこ見わたる御路次町

きくの都や毘沙門堂の黄茶ゝ
名月や鶏雛ある井の小雛
孔子盗路一塵見のさて
うきや面白し
まつの月あとゝ手とる出家かな
うらひして娘宮いる春の月
業平の一疋似たり春の月
茶みけ茶と木ゝえゑめてしありしまつの月
かしこにも人行方の山を焼
餝笹やうまいぬする茶くかくし
とちかしも田中の神や餝 出入り

きぬ〳〵や毘沙門堂の薄茶けり

如月や鶏観てあかる井の小雛

孔子盗跖一塵宛のさゝまき

うつゝや西角し

まちの月あとく手とる御殿の所

うらひしても娘宮いりまちの月

業平の一部に似けりまちの月

なみけなとふえそめてしわりしまちの月

かしこさも人行ふか山を焼

飾禁やうまいぬるふなくかれ

とちかゝしも田中の神や飾　其人

ゆふ秋や露のこほるゝまち　さしく
かる扇をとりて歩るや岨の橋
まちの水まさ小くしらやえゆるあり
雲より降るそ陶しとの葉のる
うちぬれぬとのこそ亦かれまちのる
これこめて高かさ脇んとるのあめ
たちのの漏るをとよし梅か嶹
まちの雨露ノ川の露より陶とうある
使秋もいひよくなかやとす細め
几巾
几巾すえぬ見とをかし　南吹

切れ巾をまかせて来るか虎か梵義
山石
日よりかさらし花里の几巾か来る
朶稲
朶稲をとる鍬が佛のまわり
朶稲やとゝのれ神や日のかけり
葉すむや菖蒲のとやかるなく
とんほや流されての里のまち
蒲公英や菜の蝶の在次手
相生呂利とわるる
またとりも胡蝶むまへよい日利

榴月をくれのひまはや母子子　ち数
然らちも郷かつく日か蒔
まよいすのも死ぬまい時をも二番はく
三葉にまでてかたしらにさくれはし木が

雑子

並先や小東のみにもきしの表
酒をとりの橋もおやけきしの声
雑子のなくや人をあてまる子の雷
猫の子みきしそ進こむ戸口の印

瑞る了

雁なくや菓地の庵も瑞るとそ

行房をしかさしとめくる扇のみ
門田かり立しらやうてし行房な
あけ田にしはしすす垣根にかくしぬうち
遠乃男の短頭を二るしくる此の説
ままのそるるに書あをとちをしるあるあ
罪をりのいとけなかるや　如雄の子
平迚穴八幡の境内市中をはるす
遠に人なかり林家をこしなれそかりそ
はとに他山の石をひとをなさしむ
角あと此庵もそこの山路也

蝶

なれしとて月れわかるゝや　花の蝶

子をとるをとすはいやしや　蝶の服

よつはまるようしのあはれさ　胡てふ

蛙

啼わかれしあとをしたいてなく蛙

かはらぬもなくは妻ひく　蛙かな

思ひとしの余念もましはす啼かはり

その声をとやうてあはれなまなり　蛙

雛

よくみれは坊が妻なり　雛かな

邊邑にて俳諧せし時

芦花をうめて雛のむかふにあはれなり

花をたのしむ僕もありて雛の宿

打むかしのことを物かたり

我身やすでの翁はいはひあふ

御代は末代と守まもらんとして見るの花

日本は花をそへてあふ春けなるらん

萬はうつはなさけ

あのとしや親の花きやる花かけさき

花

玄川ちのちる路人すゝえてをくり
後るの後るよゐて花の山
ちのゐ入口まゐしうゆるありし
もとるちつハあれとも志のゐ
霍芝集中ゐ吟の路あり士朗とこ
あの生をとうえて出せし旅情の句
ゐふかと加うさりゐるをちの宿
荘巌寺の満ち生ゝ蔵ミ巳の鐘の声
もすとしかられ覚侍りて
いりすてもあらん几ゝ親やちのゐ
ちのゐ平置てそうゐあしろふ

ちをえぬこつ秋も加ゝぬるを
あるの自もすゝるぼろんちの九

寛永寺　五句

あ給ふ代のちをましくし麓亦
院々の蒼青も何石もあはり
大小を弟神仏寺もちゐる
東叡法主の御林あの紀あつて
む七月風のちゐりゐ戻れくり
花の上ある月夜も務きあ小
風呂敷ゐゆりゆきるる様物を
川ゝ川るとて

古川ものちる路人やえてをくり
語るの語るよめそ　花の山
むのる入口まりうゆるあり
むやるちりにあれそも　むのる
霍芝集中る吹の路あり士頭と云
あの坐をとうえ出せし旅情の句
るあかと加りをりけるをも　むの宿
莊嚴寺の滿む生戯乙巳の鐘の声
もまこともかゝれ花乾りて
小川またもあらんれし鈴やむのる
むの寺見て　まてるむしろうあ

むをえぬこて教は親もかしへぬそ
あるの月もおりとる陀ん古の家

寛永寺　五句

あ統の代のむをとましくし麓耶
境くの蓄蓄も何石をかりり
大八を弟神は寺ももやる
東叡法主の御林あの花あれも
む七目風のをあり了下れ久り
花の上あるる月夜も勝きあ夜小
風呂敷や爲あり陀きる護摩物を
川ゑ川るとそ

路傍に果し冥加やむかしを二季試
花見えさる何の月しやねきえきりて

木母寺

はとし紀土堤に出る土堤のむも
海れぬさしも旅よきあとひありぬ
さて人々の離遊と
ちりかゝる年に名せかり小風兵殺
落果て桜ひし樹への名しきる風

桜

ありまくち出るてまひし神のかへり
出きしとかへし桜て果る月夜の風

天路せや九品にあてゝ音れとも
会所して講も皆多し其の山
唯識のここ中なりや其七月
唱や其の茶さけの人不来る
其れ風七り小路からの日和もなく
勧進能ありけるとし
ちるまも平たいらかしきや絶太郎
永れ議ひ出るるふふる合し
宗貞ふう抱りふなしなきも見ん
上生より信濃昇り帰せしぬ
其れを見さ御所さん薬師堂

所境と界し宜加や其を二季哉
花のえ其るものはしやねまきして
本母寺
はるとし北土堤に出土堤の其
酒れきして旅立ちあとひありぬ
さて人々の離遊に
ちるまも年ね又せかし小風兵衛
花果て桜ひし桜ろのなしさくら風
桜
ありまく出るてまひし祈らる
其さしと外ろ梅て来る月夜の風

山ぶきやぬしのしら家又見る哉

山吹

山吹や家の垣よりておしれ　勝

やまぶき花の浮てし　儀と云れけり

山吹やあれて葎に茂る哉

菫

家なしに雑下　子の松の下に生れ

世にそむく庵の花かりに菫　晴

あさ芽あるは花盛に打かくしたれ

ふゑふゑ花の咲音も恋ハ帆くらふ
五月雨く丸をさとせし比
あらし松の御幸も有るかちる桜

桃

桃のむ厨井涼しきとも觴なへし
酒くみ鹿太之一章桜ひと花桃一
章様あと題を揃しせられ
郡稲も色こきもせやひと花桃
御かこひの外ハ世中の桃のむ
山賤ハまさみても来る章歌の外
ちりもせてあくある木の風や花の中

あをさそや木ハかも炭をあふ春の風
あふ春ちるもけさ行て秋や磯羽蔵
山ふきやぬしのなき家又見あらし

山吹

山吹や世の捨りて　おしまれ　晴
やまふ花の咲ても　備と　云れたり
山吹やあれ行く庵のうらみのあらし

菫

家広小路　子の松の下を見えれ
世かそむと底の花かりの菫　作る
あすからあるさを見てに行かをとし朝

有せ[illegible]

いつはる紫鹿のましきり葉に

すむ虫の声あはれとおもふ中あはれまちや

こゑもすゝむにこゝろさへすゝ若しとやゝやく

生路に迷ひ出て十悩にとり深く

蕣は清蒙にさしぬ種の序なれて
咲ものなれど
多しては落花としよむ事なれ
蕣寝に咲かしもすれこ相生
そこ豆のさやにせられし枸杞葉なれ
山人や薪にすとて木實植る
まの垣の欄床に文書やある
屋き錦すよしの手ぶるとも有
とちきりなれ
蕣にせぬちぎりにまくて蒔ての種

地にあふされつら誰ひて東の前
足利より出て理綱て名所
言は代の杉に東のなれ
行春
行春や皆に門明て春の留
春をもし惜やと嫁の春のこゑ
床ちに見るや旅但の白拍子
いつはる紫慶のましをり薬に
すむ虫の声あつしとやむまつや
こゑとすら海にこうさるる岩しそやく
生坂に花り出て十郎にとげしく

黄昏なりけり
姥ととも門の蛙に笑はれし
み代三年うる歌人まてはさぬる
ともなりも眺かく向るになかれん
とこ后の月とえることのあめるなふえん
やさるなれとも家移とおとなん人く
の姥しさ押そらうる中に一人のく
すしもうなくなり行るもし老に
此代の小町小いまえしの形見とも残りとあれん
一方かも崩しうりうり乾きなし

六歌仙讃

黒主 若年の松にも花しほ名石京にふ布
業平 業平のおもむきんと人の云よりし
遍昭 蝶葉には何となさけを嵯峨房り
小町 もこ色しも実をとりなは有てふふ
康秀 なちをとふく林に史をとくるべしら
喜撰 ひきこ露の峰にものせうしるはき

読見より人目まさと云はなてえ
もこ色るまと句七種とよそこの十時局
小あ川するゑせとのともの其するすく
一とせの元日せしをはびもなし

二月にも祝ひ祭りまん　稲まくら
豫ることいふもおとけさ三日の卯
卯槌を月ゝ春も見せしや四月
菖もてや五日の節句ぬ　禊ある
まちの木綿技ても祝へ六日年
越すことをまつ見ゆるすみ渡る風

暮れぬるとゝ暮れ記

南蛇笠之猪花の若葉し遠くたこハ
まつる胡準の枕元をもろこふ
とゝ来ふる春の裏若葉にあるゝ小窓
袷にもおゝ松もさひしおゝけ藤
十路又春待のその宿あるによるたとや
旅人へかしくす寝も有りし夜の見え
家毎にありあはれも出まされ　春の庵
此と恵まれし人もちらは露天橋
あるとめでふりよ卯月のすゝ川
帰人の三てゝに好子のけもたるゝし

すみ多宮と云土二の名をわかむ此佛
方の西にしかりし一行の内ともたえる
「かりすなうの作に行年も弱せるも
のりもしくよみ覚へしるるにてらし
あきせて思ひるてるの多かる
卯月ふも宮として羅漢を十寸鏡
青蓮原 樗垣の業尾かゐ宗しにや
青蓮寺院 門川 田しやま起と在
行綿ヶ龍 泉水に在り
深川中寺行綿せん 佛 生会
うち人もいさしせめ大 佛 生会

其日の中にて果ぬ人多りし 十路屋
白利鶴秀ヶ能見堂ふ詣をともかまやに
景を文びかつ 六浦 青 草をむ
会を済せたる二階ぬ人ふか在時も
四季にも云もひかりすなりて
あり宮ヶや 扇の下や 四 あと亭
三宮あゝすれのゆふしへふ庭あ三年
と云るとる経あり 二八比地の色あれお
もしすれぬ事のとの〆もて彼旅下位
の新にて元知ぬ親の気をとふ終え打
まさしゆゑすゆ 旅下位の業師とも

はらひ侍るころや雁林斎ハやふり
にめりて法こと云やうなり
此書なりいさ出しけれハおもしろけれ
おほくさ記御佛をも為下師のやうにいひ
なしけるも飽旅のおもき日ひまれるべし
筆生母ま月するのありけるときけれ　許

杜のむまそそへてもますて　杉
表見の日かくとは　杉静
深川も淋き子や　子観
小かもの川さ九ますます亀井戸に詣侍て
かくて為のいましめらかてそか魂ハ

おそ祇しの鬼の月まてらしろけりを
さる形とそなり連派なるとなるをなり
此の百八はまかりてさのをしなる形を
ありかり為ハはかしの白太史おて神に
はなかりかる見せしめとなるやをとり
东ハ川なくて仏をも松のをかに包むと神
のちけひきむかるむくひあんとかん
东み字して古侍りなるハ
諸めくるきし小車かしをや　悦喬
小石川小日向くわての先景
参り戸雨節をさやしたり　杉字

白上杉畢竟ニ谷やしハ神代のよし
勝る所て白上杉畢竟し
海あらりハ京のりそかしん勝る
芳津の湯泉逆者ふ京り作るれ
あびせかあて所やふ根の勝る

開古る

ききしと危あらたれ川示なる
かんこり所や頭目逆れくし
告短目手生れとや川よ示なり
ふ介しの時の目の志すかんこそり
示存る所や濟去し前一毒

つく氣ひともも老ぬきてりし　梅田枇杷
苗暖ふ手もたう化やりう子
汐ちかやいしきり路くいなき来風

古杉坡及鳥且嶺香存を先逆ふりて
ここらり四ろり笛根頭ふをなるとり秋
音てを泊り平定む目てりてるく面
ふかりれハ足踊ふ洗ひ好貴りきあけ
あとしおれしあつ勇れ思ひとあれと
いえともあろし首逆倒の筆ゑそりふ
出るるとてもなし童日磯ふ神篁し

くる人のみてもわかるにしるしなりけん
てる月のかつ川ふても 寧 衣
本首の橋見越の茶裏をうけて左
の神子神を系つれつきの四方を藻塩よ
寺川らいかゝれ
かの月りの揺かん神子あるゝよ 忘
出るをめし蛸をみてみかれ唄ひかし
小鹿や盤とうとて蛸の 逢ひ
胡風さく 苗てうるりや寺川 鰹
白戸揺をくらぬといふ松兔ゝよ

雑さけて栗の道さや 亀のうち
鰹夜や大地の夢京 春もせず
国扇をとりて出れかゝ哭し夜の月
夜山や浜 戸照らる 衰の門
東り山や此家に悠しし 迄て悠るゝ
一休も毒いそ悠りし 杜丹のか
ちるとても夜かちるゝによ 山杜丹
杜丹の名あれこれとかゝへまちる中子
春秋の器をめし 春有これか居が
うちかけし積に似たり 宗 逹

菊葉や萩や種く日うけ方
作り百合の宿のち植たる仕方ふ分
百合売もしたひたるの噂ふ居し
濱ゆきとの冬しふあれ迄ふ住ニ卯
庵ゆるの白ひもすあり 瞿栗のむ
る貝之も仕損をそえよ 蕪村のむ

杜若

我年と形ふいよゝ飽れあかされき
来らるふ風年しまたみるや 蕪村のむ
急我ても法てすがさひし 杜若
言す稼や見る人も来ぬこの妻ゆきと

きひしや出きと嵐方の蕪村のむ
庵年して卯の花えさや回一枚
忍はしあらて卯のむれしむかし高
小高村ハ吾妻北濱氏ちその高をさけ
人ともくきり何ふえ四月八日を借て
しるよ山しうける
卯の花年咲と戸も見し 小高 村

蕪村ろくや世あしう姓人のまありく白
諸親王の御筆地あるつし
叩く楓くれの代菓子や気高る しい

曲水の茶碗も見ぬわりかいそし
仙家僕の雪と出ありけり新室有
とし中に夕座を出て見る短冊を書る
とのかゝよませて見せて聞く
楠ちるや七ツのきりの出所よる
木も墓して菊の塑の宛
若葉作なる蒲の花あきのへ見てそかり
ひと川若葉の下やも見えざる藤里だ
をさき木の杏あれてくりり篠葉の風
筆や嫁若北神座の小風呂哉

子の年やりて夜も掛まや竹の親
おとひ出て菖蒲もとやりぬ池のる
森るこや手首抱てもあやめ草

所思

うきつ絵や遊ぶれも太刀を飾られし
梅る茶こ蓑州の極ひと川煙
五月るや何とかしまの渉あ
比さらかや谷の小橋を形ひあく
さくく作千気の手きりし小るだ
五月るに金気節るし篠の漏
五月るはまちと字解の枕あらん

五月雨や志荒てのこく氏芳
此ころかや藩てありぬら月さき
こゝろ市や此雨も志二病篠月雨
九朴坊旅中たゝの刻子を忘れ
てこゝろ示しとゝる

壺半山の日となりをこうなへあてゝり
三宅四宅とて吹や其名の其ありし
合殿さくや世は西行る一旦落葉庵
宮士紀の合殿とよりはく其語多永
禄の吹や去年の六旬の一周忌

宗陽もとし夜に東に夕り山の町
下宮や弱の都りく小蓑原
何虫の蝶の見りらみ本下やとし
康頼法師の宝物集をあさ翁覧
て記

世にかなん夜の刈芦の丸屋しく
海とこの藻とし住家りやそも雛
擦よせよ藻にもも咲草兔床
門ひとり出水に青刈苗をこび
子よ乞女よ都寺の手前しも忘ぬなし
植し泥もすまゐりし菜や恩恵

てやしと植てありけり　田一枚

あ鶉なくなりけり　鶉

草の露しもたてのせんさ川の鶉

さ原さ於ハ来れよの鶉ハ稲かけとの

谷のさしやなるも尾ねあさ啼の鶉

振らきし　咽つまれてや　鶉のこ恋

種の音のきゆるひまより　瓦葺

茸ちもと　蝶の振舞の　芦葉亭

この奈らも原ゑある褌抄まよ

熟されハひらなれもなもよ出事なり

草庵　一名物有

月ハ見せし落暮月の前なし　井

けふらでハ雨とるらめ　氷室宇

稲室舎のなかしよ花なや　何太

熟菜田も旅はしく　出明入

此は茶は田ハ落穂の雪すてもろし

田とりあるくひ奈るへし

暑きりやえて奈し塚のも加　鉦

てあ原るのめくりありくや　雲の峯

雲の峯太名山名ノ　入　加ゝ氏

葬礼の田中を行や雲の峯
夕立の跡の岩をいとかしき
浴浪や馬の面とても濁清水
手にうる清水は気信をとうけなり
しらく人跪てかうかは汲て涼し
涼しさや下部も家屋も二人寄
手むすびし頃もと思ふ暑く
白扇
不意の柄も涼やさに扇を涼し
扇やるし面白すてすしさかり
手にかくや青葉散よと八ツたり

て姫の床にもうえしたむしろ
箕まくら付くしよしとゐて扇ん
との友も帷子着たる四十めく
主やもの團扇にもあらし行　桟
扇散かし團扇からり老来うり
梔子寒き糸瓣年の宗鑑をさし赤れ
言葉扇や扇をあふく寸あれ　面
蟬
大目の格子の明く日蟬れ　しゑ
せこの羽出すかしおもてからりしす
流りけてやすちの雨をとし蟬の声

蓮

萩殿の一の人〆や蓮の花

朝日さす露ゆりすえて蓮白し

浮蓮に見えさらんとさへかなし

　ゑぬる人ハ何なる人をと

蓮池に漏りさしてみるやみかし

撫子

莟生まやなでしこを菩にかし

花暮の目なとハてるも見撫子

撫子のもしよるひまもなし鍬田の橋

呉影や芦火其がたかりけり

ひるの月や鞠子の汁もなかりけり

蟷螂のよしあるやゆふこの道より

きのふもなきたまの方や所唐裏葉

　何となきひかるるまでと

出来なれと麻の蓮ハあわひなかり

山の色ハ暮もやそめぬ蓮かしらぬ

漏紙の露もうれし黄葵の露

小竹て塩明くなりや菊葵の露

氏子なさいや幸子て麻とわし

背の緒月のなして紙ずと袍あさ

席ゟつしや梅干ほして　一重ニ間

以上夜酒ともかれのさかり　昭

御稜

御稜の夜七夕姫も槲にゟ

ゝそ祀して風ひくまつゝ菓し悉

出直せしや雲あつのを作りて御稜川

随角のい川くさすれし小娘のもゟ

あく消て日影鳥にゐる作涼とる青ぶ中

若者の余り鏡をみてゟをさきし指や夏も

おき人のいすをゟゝいゝ遠くしう仙少

あり行る人の許より宜禱ゟあり記の

記念永くえめひとゝて清女か花の箋

を送りこさ花ゐるに老くる旁にへもゟ

く余偈の世のあり旅なる心地して只ゟ

ときその世をものこそあく

書夫の箋にハ諸えんこれ箋

樣が御宿所にして中村ゟ君塚（ウタ）さ

七條をとえすあかりゐるに七人連ある

もありしと梅妻ゟ傾壊をふゟ出しより

道ハ諸と作ハ柳子をゟ作るゝある

あ前りぬきておの作ハ種植ふある

者の中に諸鬼え切眠の光り

記念永くえゆひとて情女の托の手紙
を送りこされしを花やる家の人に去りし
く余波のとのあはれかる化地して出でし
ときとめ世をとのこそあく
當夫のねぶさに、諸兄んこれ手紙
様子御言印産而して中村歌右衛門
七役をとんで本かりけるに七人連ある
もありしと梅素の俳壇をふんで出しより
近頃は誰にも柳亭とふりて侍りくるが
おかまりぬきしてかの仏に猿猫にある
蝶の中ヤ注鬼凡ありし眼の光り

大磯の局か十九の春盛りか衣裳う
ちかけ艶やかしとかこ叶へるか袖の
扇や菊しりん口とりの乙しハかれ上
て蘇のうへ乎ᛇしのべるあとしする
此形うきゐる舞の讃
富士をとなへ見ましゝかさす扇なり

清との毛堂
地

蕉のとゝ稲の歌

立秋

おもふ事もなくて涼しやけさの秋

夕月や老り露とよむ嘘くさき

死ぬるのそれおもひねまん秋の月

三日月の入さかれ松や扇さく

七夕

星の朝やかしとつくぬ事もなし

蜩ハよ紀声とむかし之有

蚕はしてたのまれてしや大とり虫

隆慶節西ふり参る慶上人物語

きりしすくこやはちとおし世き

扨ても七夕の梶も出されし

さくしとて星の名や詠ふ紫

一夜に降ても銀川のりうとする

とえんうちかこ川小女子蔵る

龍のあまてふなりぬるの日し

早ちすくさうふ奥あり席の前をしかえ

八月の頃のるなるゝ〳〵をしき家綿

小雨れちりしなきはくひろふとて

真風としすむさへ涼しおしの家

まつきれもそよちとまるや盆用意

いとなかりし丁寧と矢ひ名るとし

人列も雁かいとく盆の名る

夢売り茄子かり青孤や松の角

莨のすこしも衣ける

これやこの盆信て何の都との

むかし強く薄て信中もおまくん

追々や哀あ皆ゞあすふ子の多き

となるあて追々くて降る名り

盆るや彩ひき関本も風の出川

鞍いまとさふ生まれとりて書むしろ

日本武の御いさをし そこ家小蔵

なりけりはじめてむかしみたき越る
みなみの方へ降りける様ありけり

稲妻

いなづまや大根畑してまもまり
稲妻や猪をてあはれ庭しきどり
いなづまや萩に堂は人の中
いなづまや揮よりぬ荻のたもとかな
稲妻やすさまじうなる辻のむ

霧

川までも隔てしりけり霧の海
さし霧や人はよく見て起てる

又見えしぬらぬはぬれぬや草の霧
おくれなや草にもぬらしさぬ霧のむ
隔る事の中にもきくや秋の霧
情ありて感せしらるゝとあるはまの
くわうて眼下に命にかはるのゝ強
幸ねのはゝきて身かくしのはやく
しかうんとのこ人かくて見きかに
下霧やこはに夜寒くも島の毛

無説上人にありしむ

夕霧の佛とさして膵え ゐり
月もの夕霧にひとりとものぬれかな

七夕も手向にちやちる木槿哉
仏前花をのにゐを入るの作識だん
とも家の菊磨らせりもの
百年の手向もかもちる木槿
背戸の秋草と作らしのむしらなき
ちる柳芦も槿花の付けり
萍
能く月も日毎かさなる尾折り
萍のきけあや此池の底の如る難
あさ月にみての月見とてあるなき哉
宗関に集め夜あり

能月し夜もさゝらん　秋夜
芭　并に　ととに
稲かまに芭にしあやこや山のくゝ
ひとくくと能書転くすゝきの卯
浪ゝゝに尾むかく行に見え句し
日く行まてし日のされ本の尾花ゝ
め萌もむ
まひしきや蝶のかゝるまと下庵し
念仏かもましく似たるや女萌もむ
春かとも稲ともされと下へし
何ことへし何のすくせに後あくくき花

好憐この子の後名に此る持たる後に
知りうるもめし口をとしき

萩の夕星の余波もありもすなり

景きやれ御室能や　萩の京

人宮こまるもなしや　萩のもとに

ことととりの巷文ヶ門にかて対して
能楽をとひねる

小車やうそたれや萩の七そのす

尾にありし人ハうれしそのもじ

虫

なくむしの中に出しきるの鼻

そくきことの小石のなれきりくれ

鳥虫ハあをとをて名千りよめ中に
松虫の五違ハぬるすハ称せにあやまりさ
ろかや　一勝　両持

鈴虫よなとおもにかるところハせぬ

松むしよなと月にぬるをすハきぬ

きりぎりすの脊にもおもふさそれ繪ニ

月そのも実にそとまた作るにもこと鳴

芒かるやの声さる　蛙ゃ鳴

蛙蛉の蝶をとそしるや　赤の五蓋

萩むら尾花まさニ萩門　小鷹　持

も川 月や烏帽子岩しく人からうる 執
月よれば送りし太の伊勢参り
身の雲折ふしよれど夜の名残ん
あちこちがか月のところかしこ何の
八十あまりて今やいくかの月
大原や月に誰ひく家ひとつ 川
源光坊の画四睦のうつくしさ
明月にも蚊帳もつきん 月 枝
かくの月ぬきにさね諏訪の湖

待宵雨祈禱

岩ちかや鉄も雲丸声そへけ

待宵や浦嶋の笛のもちしてん
出宿さめ十五夜ぞ雨さます 何首

良夜

今の月さてもおしまぬ光りかな
名月や小ぬかこ月にし 附のあと
待月も影しらぬ一錦の 里
これほしや見つかれ家の森ぬ月見
背 雅のうしろすかせしやもの月
月見をよかくそてる者花なか森も
老となり人にきくてるかな 翁 然
として只東壁に濁酒中をとかく

誰まつんだれも来ぬらん月と宵
かつ橋をあてしに丈なる舟の漏にそ
この十四夜にそれ橋さへあるまりけぬ
く都秋やゑの空中と隔りてきて
ゑと宵天のみなさへつきぬるや
家よ年の風似みて折かしなる望の
日いつまやと人のとひこしけるを
十五夜と定めし今日秋のゑ

十六夜

いさよひに咲しの多力紀夜なりけり
十六夜に一宵も有し松の浦

いさ宵やちゝぬなんて来なとこそ
ちる川沢や松の下なる綾ゑぞとき
汁かきてしかき込鍋やすゝめく
稲の穂掛大手をかくえて神前
小笹生に沙草の花々や露こそ
うゐ家や地蔵らしとも誠ち隣
家のめつらしうある夜こそなお
あるは汽車暮月夜にも拐むら家
園冴の橋に月さと安くも家

甲斐路ハこゝにふたゝびきぬや夜とこそ
我書の点ふりふ花枝さだ
處所に傘のこ語し板雪かな

砧

唄ふ揃ハ何する世ふ行や小夜砧
河内語や情ちらりて夜ふけ
古詩体あまさよきころ何れけり
僧児あわりや窓にありて夜ふけ
てらるの何やろてゝる紫苑に印し
すかる外みち菊ハ枝ふ枝もなし

あてしてハこの雨しらさて仕舞ぬうり
芦の穂ずれ星離れ出るさしめ〻の印
穂芦州信や其のまゝ水滸傳
犬夢のゆかせうしるや稲の印広
ひやしこと地を這ふるや芒穂の花
方かとし詠まくみちのおかうれ
坊主の手より花あちとしとぬかこ飯
黍の中噎飛して誰ゝまゐる
搗しまうる所あらふらし黍の出来
粟の穂にかゝる煙のひよ行家

二世安楽とうたせける小寺の節かな遠し
御佛の肩にも一把　稲かけ稲
須濱ありきて扇あり秋田はる
かけ稲の穂やかたにも立ぬ坊が作
子をもの音や稲葉も眠りをさまさず
稲かりて仏に祀りなりけり　枯
東山子
秋風よ東山子なき声も　山の雨
と川かくしその山枝々くしいを
稲か庵よ　門にかくしをたてる
雨の夜の名　東山子にて　袖をかくし行

鳴子引　里に帰りて芦に風
山風やこの鳴子のむしさため
蔵夜の茸にさき用あき醒をさひ
きかよりして東から田もかまりか
琵琶をとぬ雨の音にへよこの鳴子
人なる風　業なりありし山の川枝
竜膽のくさもみぢせり　雁の声
狩をなむ雁がなくへ　鳴かなし
雁の音に月さし涼しく夜の風
小舟に雁の音きかて山居か
雁

天くのや星の行かふもあはれ日比
雨露のうちにあをたをしきや天の暮
ちりたるく天にふ江戸も同夜のふ
も月天や宮路にかゝるある夜のふ
天あくやおやうれ水も流し気
今ふみと青楼まひし昨の暮
昨の暮院の菩薩を嚴にきられ
鐵鈴のなにとぞてまや露の陰
昨昨もなくかもかともある死
餅くふゐる一夜の影やかくらる

后月

先つ路の今よ夜うべ後の月
後の月山里ちかくなりにけり
あまくしを坊ミてや十三夜
後の月浅毎掛しう夜のよに
詩(?)を云として いくよ見かし
十三夜来ふあるきき 隣子 窓
蝶にも川とししふしきなかう
後の月 きちや二人ふたび硯
日本の行京に くとゝ喜しててし雪京
とのあゝ京にありてありし気をかし
名ものなれ仲丸の月おもひ

おくり侍りしを阿波の州史のあつかるに
升市を書て注しける五郎太夫

七月の秋や小松も荒はてく
身かゝけり戸の口つくろふ柴の山

一瓢上人のもとへひとまず尋ね侍りて
炭たくあるも秋すむ苔のうへ
柴の戸や柿喰ふて猿の奥る
竹ひしさや坊主たまる山の奥
私曰さつま秋あはれしていつもかゝま
きりきん

耳にはくさ蘇のきりや柴の音
檢校の坊主すゝる秋のあゆ

茶
杉をしれ山まもや茶摘遍き白
関ましや茶咲くりの浮世かな

莫嗔野店無肴核
特酒堪沽豆莢肥

あきすあや菊の日和ときゝあはして
きくの香に立よりてきゝつこの硯
菊花秋に浮あれ[illegible]かきくのむ
菊の香にほのめてしや月夜坊

小菊咲く日数こそ有けれ椎がもと
其菊はあくまり盛り十日かな
碩布の山居にて
ふりりのいく孫ゑやきくのもと
やきもの八条皆の器をわれしとてさる
く山にて此の蓋やしの根をも年の瓦に
此してそこ家に云をとく山細にとよめる
やさしめをとあり
焼鳥は籠る菊にもひかぬ命
る露の明るつひしきさ末のきく
みちのくに此百非坊一ひとつの草稿を得

去年白川の関にて陽りなくて七月
九日といふ年とも紀にはかへさる
うちさもとて菊見よしるそ露をとも
玉菊に
傳聞のめでたさ見ゆる　玉菊の命
すでにしや玉菊にもと降る露の色
去ぬ人にもかくて排ける花杯玉菊に
振る齢も若く神なるや　小坂翁
小坂翁は当国の金山をとむ年生れの国
に翁く一条の能路くして二十ほど折ふし見え
ありとて歎ス

梅干ほと茶にしかや菊の花
ひきよせて蜻蛉とりぬかり菊
うつ板や木槌ちらしたる須賀の町
むかし坊主小侍ありしに今又あり
渋あまし坊主小侍の門の柿
つねとの葉にもゑみや山の栗
さひしさや菌のうきの窟さまり

行鶴

ゆく鶴や松葉に二羽きたと手拍あて
行鶴や野路の羽拍拍子くくし
たまたま見る事にも行くる秋路かな

はこそりも事絶て二色なり謝の秋
何事経年にも有なる九月余り九月
といふまちとられぬるも七能の諺も
かへるさ伝へよし石海のあまくれかゐる
みをくれあまくれきりけふに
蝉もみぬ峠の家や九月尽

人として酒のみあへ夜の梅と守
えしはとゞの十七回忌日に今年
も孫のまへ孫をなかさゞし道の幻
千鶴りて口まゝ過きりゞ行に
はめやまつ祀 新酒にくまし 白雄 来

萬れをとゞ冬れ祝

時雨

菅原の畔とち□る志く花の都
ありねの宮も蕭茶蕭茶も□る時雨
三くるしと打つ茶巴と嵐の子
本母ちつかしく花も夜会の方を川迄
清白の木標もましく古加え経□の
河今をよろこ梅
旅を行く路回のあとのあそまり
竹もおりてよし寒る冬や錦こ月
□紅

霧わけや生ぬ葉も枝にのこる小すゝき
雲の晴ても旅人しかる京の色かな
あとの雲浦山しぐれもなかりけり

越前の国ありきと
かくて雨や日雇出て行　凡五十
雲の芸かくまて旅をとりひしめあれ
旅宿実もてしるの気にてもし雲悲し
ゆかし人は旅父の国と有るよし隔と
不たりとも見て公私のあかる空
山県地若干多く使りまうせかりかあへ
てまうさふと刈るをとかさむ山と

云さて人目もそのもとよめりゝる山
星のいろにも似ひし
木く霧や鳥もあつぬ　旅山
牛かとも我さき蒔の頃枕のさゝれ　霧
霧の化すてそう似せし　小春た
芦の家のとくみてあれし　小まちなき
うかゝしや雲水あり　山雛とく
幸達る役の如くみゆや冬目なき
冬見え見ゆる富士の人なりかな
此句冬の月にすてもつとしき是ねの

呉竹ゟ迎ふ志ぐるゝ夜あめかや有ん
冬の月 梢の白さ見ゆる 芳り
尾すゝき頭にかくらし冬の月
月もみぬ 十夜まつりの背中はき
芳の菴 寶誼
志ぐれ会やあるを佐はまて錦所る
條あらし昼を新ってころおゝ
かひしてすを
かゞみ君の錦着れきてし雁翅 棒
よ苑なの四のうらにころかるかおのよし
金人之かしらを小あられ

翁忌や着も飛脚かくしとらひとの
小千谷由都留亭時雨會百員巻頭
會式めくてりらふあらぬ 翁の日
あれ比寿講このたり言かいくらかれ
人も合器もとりわけてさて納豆汁
ちしありと見ゆる家もあし冬構
脇あくや背戸田し今宵冬かまへ
玉河もゝ人ならき手利かくらつらせし 句
買めく鯨がれえくもあしろをとりし
押並ひえしう蔵るもさる網代なり
かさく日の佐やしもあいらあしらちる

たしこよのよひを雲取とかゝる人 宝
めでいよ〳〵蒸垣の橋をりて作し稀
作るつきよしをやれかしくる飛の花く作
橋の大とく袋あるもおとあ名
橋の楽し 旅人 僅かしあり川
名もと傳へ山色道のてすよ 千葉こゝ
画暦ハ布とて大橋ハ大さかりし
その名の旅傳旅立ちなるとて
臣楼なり楽ハ行きくもいつれのみ
あやしとし橋の姿もあも把をし
川ひと月新るを佃嶋あら磯芽の衣

見わたす江戸橋もの名字の地まも
ちくれ
今又千代新もとやし降のし
日ー傳吉の社あてし
にえさや飛ゐれの栢も　船中
飛衣ゐれ　刀自の袖　桜薫るが
唐錦名をおも年のよと錦こし名ゑ
飛衣二ツ花と負しと着意祢し
ゑちの名あか六つも七つも一歴年のや
しくきひとかるゝ
かゝこえんし錦をとるや晩の声

所ゝさん有ける武部も書かして
前垂て居るや小さての持仏堂
岩窟とすさへなかし月日らか
をなけ箱つらなる岩なる岩の歎

日のはまる御法も忍けり　石蔵のもむ
小文庫青磯御祭の調をすんと云か
加久の耳谷けり
うりあせさあるすゑけるや　枇杷のむ
墨田川小書しある家をつきなて大目
余り庵丘なる浦人の亭か俳諧をいとむ

茶山をもとれとそえきり似の仲
もはくまとを思えけ柱くや古茶の木
こ川くしう人もかうあれ　枯尾も
我るをとえて見かゝはかな花も
梅翁をと何をとすそ啼ましら
第かしや佛のをもも一かゝけ
はりこの国ところしろ成りあなる
筆子をと硯てひてるとして
尾まと似石の竹の影もても出れ　なる
梅あしや香のちゝはく風のあと

芦ノ小畑とて人目もかれたるなり
たゞちすゞみのあまりにハ松ぶるし
おもむきのぬしなりける つきのかるき
を妙府の㐂島亭の説ことし名所
無も柏かれその体たしく
今ハとて春かれも松くろかれかしハ
天竜の喧吐きこゆるかれみゆる也
岩淵の渡し僧温川最第一の急
流とかや
岩淵や角下渡れて急 水の色
水の春あちこちかけちり花さるも山路めく

隣ある木もなくて銀杏の葉茶の芽
菊のけしも菊茶しもなり何の花とも
なきけしや膝柳までもむら葉の色
詠きみちこ云人芦竜なるこそいてもや
く上方になりんと自とあつるに
まりすのゑ極なるへし春をと旅
多く花やけさ禅定の春をとけ
茅舎なりの庵なりこれか深山のうへ
相州し祝のうえみゆる山の色
大の子のも下さるゝ粉や芋かしら
杵ほとも茶菜川ほとりすて 細

蓬白し海とのみぞれあるはとらし
露の題せしとふくゝみ白片し
みぞぬ罪なしの穴のこゆる　まそ

水鳥

水鳥も閑論さまもえなくしや
みづとりの入まもりくし　津久井縣
鴨ふくや水そちゆ　南志什
みづとりのあくらし浜くやみそのたく
飛鴨よ逸哀の御代のとるなりん
小鴨ふもまもくしきや　都鳥
みづとりの旅鳥し逃こるもすかかな

千鳥

千鳥ふかき室のわの夢に北ふきはるめ
鶺鴒も二三度としる千とりふ
舟の窓千鳥しし沖洲志るそり
光耕りちちるえよふき落月叔
指も志つまる室のちとりしとふ
千鳥啼や錦の声一人すゝし
みつてこふ番ふ露しふ吾ふえい
菊割し湯ふも果るや　みその鳥

こちいとのゑくしさもし	雑汁
河豚の汁嬉しさふてうもわとふすり	
口をれのかわとひ出さ侭るとかし	
高雄のふもとをいて出て此毛類ハ此句	
を感す	
手向けりや乾鮭ものさて経の	竹
かうさけもとゞふくらて仕舞たし	
ふくき夜のちり合ある冬籠かな	
孫晨も寒ふうえん冬籠かな	
子の年ふよるろん料ゟ	松の楫
祢宜房を行違ふや本那	倩
きれしたのちまく死ぬ氣ちも	叩
猫しく花眺めあしきもないやうに	
定盤もきさや霜降の手鏡	蓑庵
雪	
ちり雪や入院の佗の神まつり	
初雪や守路の小荼師のひとり登	
雪国のちるしいしくて来たり	
たのまれて出かける綾や雪の汚れ	
汚れの雪刀根しらぬる精のかかる	
雪の日や虫しきと家のあり	きよひ

雪風や鵜の月晴て　吹きひき
娵なくや雪ふみならすあらしかな
雪ちるる風花ひらしなく鶫
一葉ゝ清気をそゝぎ
塵とては梅の古葉もと　房の雪
雪の日や簾の雪ふ通る濱の町
豆かしては(く)や鳥も由来の名る
雪の園かことし大寺の鐘の楽あり
房雪るにちて弘智の無名をしるる
人まねしみさせるる似作の讃に
京町の遠さに風の花　紳の　雪

玉寺や天井たらぬ　雪あかり
伊賀の近江の簾のある日のあるかに雪
山里や雪さへ出家のか霧　降る
あそびの節笠嶋のまつ枕や子の尾のしき
馬酔木君多くきよく振　振りて
手覗女ヶ井ハかしこに兄ゆる
こそろしや雪ふりあなるる小笹　京
山田の畔の振さく刈人なしかな
よめるかもちりなん
刈人もあれ　伏せて　冬の空
冬の空冬のもちむと思ひ　なれ

禅門の萩咲しける水茶し

松風も氷解らん　言々の入

松咲くも梅とさかし孫　冬の梅

廻年に行る和尚に植よ　冬の桜

言々念佛しるのためおしかふくまいか

老情

聲すと寐ん言も去年のもと言ふ苦る

節季やあ化か金かすみ　ちや凡

節季さそろし半兵衛ある餅の咲きもおか

花売と山炭売の鰈をも唐の線

抱線から門もおそふ季の月言

何くもと去らく今の日し用言

芝居までもうとて色し金の節

うかるから千葉割もうかの真とし字

えし脚かうるへしいまと名をも水

こゝろとも己れぬ詠代ともの通商

をし火もなくて書つく日の人か

去年血こ月をとあすうちん逃らめん

庭々のうよひて肩咲るおそこ世の

ちなそおもりけてしとかこ死もし

なく〳〵鬼追ありく庭子かな

冬ふと称て此ゝの俳諧ホ生よと云
るをノ旦坊に示れ

鬼とりも声こそやしひ宿の豆

よしのひらるゝかもとめも豆まく夜

春たつ日といふもの旧ことなれて八唱
し発せし世もとも称もられ

小窓からうつても見ゆるやとしの花

色移しぬ硯洗ふて年をへん

祐俤もおしめもと衣れくるとし

松の葉みも笛にあらはとしの塵

梅ちる笛もとく〳〵さ方を庵のとし

年の夜やむかひ舎ふ樹のかゝる音

三国山嶺三社権現詣ニ
赤城をかゝえて立ツ今日の旅行かゞ
を似しますか
月霧ケ嶺る両ともと見ゆ申し
弥妻むかひあまりハよし絶行
の実ニいろいろんてあまた
静の菜なるの花すも少なん二郎
諏訪の御社ハ此行の旅りニまいるゝん
と思ひあてゝるかそ
あゝ世ともきぬの袖よこへしませ
小千谷より長岡へ送り舟中詠れ

中にも立かゝるあとさきの草也場をハ
荒海の名しかしこむ
かとをかしう仙氣も字よ械の音
六人をと包んて蜂しなるの谷
この堂折から残暑の行かうまかり
作るゝへ不思ようもとわけしき
少寺の作るをとへケさへ名所ハ佛ニ忠
寺と申ハ元の名し申名所ハ佛ニ忠
とハ誰るそと又問名所ハ市村ねいか
の寺元ありし所の名ニして其佛ニ忠
の墓ハあなにて作るてと申ゝいと哀

きなりけり
かくよくしとても吟するの作りし忘
都鐡の山寺に詣侍るよしなき木
樵の庵をとりてやゝるほとりに蕎麦九
皆きはらしてになれ庵の跡毛の薫也、
当るへ平たのむ運のあやしうおそろし
入なれとも前世にくるしむは此世の楽し
かゝん種にもと思ひあてしゐまる此の苦し
きはその生くるはの安からんをとして
此とめて汗を流ぬるも拙く
あるしとしみこそよ入れ秋葉にきれ

草葬もと九十九条に讓られと
いえとも一長物也
為ても来るにはや物ともの外なこの
今一声のきらまはしけり
山法の外のわれの人の真似をして

人世莫為婦人身
百年苦樂因他人

まことの人のこゝを解して才気ある
やゝもすれは肝火のたかふりて一旦
物のまひしく癖もつるの多きを損

まゝ小娘のうたも不いましめんとて
二行おきてあるべきとて於又句あり
墨すりぬ硯にあまるに書もとて
ちいさいの文字ハあますらくるしと覚ん
こて梅の花のとこそまへんしめも
あく於ひありけんとのえやかきの
古きうちに後を得く原年の雑筆
ひとり川を春行をしむるとて
ありけん紀鴨もむきまぬ世のこと詠

角田川四時

分のうくてちるもみぢや角田川

黄もちる園かふる冬りすゝとうハ
三日月も見る月あるとの隅田川
月雪ニ摘て春川会し墨田川

第63822號
昭36.3.14